

---

# 東方幸運録

シュン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方幸運録

### 【Zコード】

Z01310

### 【作者名】

シコン

### 【あらすじ】

他人の3倍!しかし、30000倍くらい幸運な少年が幻想郷に  
呐喊する!

少年は無事に生きのびることができるのか!?

この小説は主に作者の願望、野望、欲望、妄想により構成されています。注意して読みましょう。

プロローグ　『え？自殺？あんた馬鹿なの？死ぬの？ うん。死ぬ』（前書き）

小説書くの初めてなんで、生温かい田で読んでもいいべると嬉しくて  
す。

プロローグ　『え？自殺？あんた馬鹿なの？死ぬの？ うん。死ぬ』

僕が自分の異常性に気がついたのは、中学一年生の時だった。

小学校の頃までは自分は他人より、少し運がいいかなくらいに思っていた。

でも、その認識は合ひていたけど間違つてもいた。

初めは、中学の前期の中間テストの時のこと。

僕はあんまり勉強が出来るほうではないと思つ。

テストを受けた後も普通に平均点に届いているかな？と、そのくらいに思つていた。

しかし、返ってきたテストは全部が90点以上。

満点だつて5教科のうち、3教科もあつた。

何故？と疑問に思つるのはあたりまえのこと。

すぐさま問題用紙と解答用紙を確認した。

すると驚く…といふか、もはや驚愕だったが、勘で書いた記号問題が全て当たっていた。

その数…合計で94問。

……心底ありえないと思つ。

勘で当たたテストの記号問題はほとんどが4択で、2択が3つだけ。

つまりは4の91乗と、2の3乗をかけた数分の1だから…

……家の電卓じゃ桁が入りきりませんでした。orz

まあ、とつあえずはもの凄く低い確立だと思つてください。

だが、これだけなら偶然？で済む。…いや、済まないかもしれないけど…。

よつすみこと、言いたいことは確立はではない…つてことなんですよ。

でも、その後も普通ならありえないような幸運が続いた。

僕が学校に遅刻すると、必ず担任の先生が欠勤だったり、出張だったり。

わからん、遅刻はカウントされなかつた。

体育の授業でソフトボールをやることになつたけど、面倒だつたので適当にバットを振るが全てホームラン。

野球部の勧誘が尋常じゃなかつたです。

もの凄く可愛い女の子から畠田されたり。

ちゃんと傷つけないよつて断つたと思つが、精神的にかなりきつかった。

……とまあ、こんな感じに幸運が続きまくつた訳です。

あ、ちなみにテストはあの後も勘で書いた記号が全て当たるといつありえない状況が続いていたりする。

……で、そんなこんなで中学三年生にまでなつたんだけど……

自殺しようつて思つます。

……いや、まあ、正直贅沢すぎる気がするんだけど……

人生が本気でつまらないです。

……あ、やめて！マト投げないで！卵もダメだつて！

……ふう。とりあえず落ち着いて想像してみてください。

ボーモンでゆびをふるを使つたら、全部一撃必殺で必ずあたつたら  
楽しいですか？

なかには楽しいと思う方もいるかもしませんが、僕は楽しくない  
です。

ところ訳で、今、放課後の教室にいます。

そして、こぞー身をのりだして

「窓辺からやがて飛び立つー

あ、ちなみに僕の名前は雷堂 幸稀（らいどう こうき）ひこひー  
かーり。

覚えといて！



プロローグ　『え？自殺？あんた馬鹿なの？死ぬの？ うん。死ぬ』（後書き）

主人公の名前をいつ出そうか悩んでたら、最後になってしまった。

orz

第2話　『女人+カオスフィールド=住居不法侵入の不審者』（前書き）

キヤラ崩壊注意警報発令

## 第2話『女人+カオスフィールド=住居不法侵入の不審者』

いつも。先程、飛び降り自殺を心みた雷堂 幸稀です。

結論からいふと、自殺に失敗しました。

……べ、別に途中で怖くなつた訳じゃないんだよ！？

いや、ある意味怖かつたというか気持ち悪かつたというか…。

まあ、とつあえず何があったのかを説明しましょう。

僕はこれでやつとつまらない人生に終止符を打てると思い、気分よく窓から飛び降りようとした。

「窓辺からやがて飛び立つ

？？ ほどばしる熱い……ん？」

もう既にあと少し体を前に傾ければ自殺できるといつ時に、僕が見たものは……

なんか変な目玉がたくさんあって、上下に赤のリボンがついてる、

非情に気持ち悪い、遊王の次元の裂け目みたいのがあった。

「……ふう~。疲れてるみたいだ。今日はやめとくかな」

「なんどよー? なんでやめるのよー? 早く飛び降りなきこよー」

「あれ? どこからか声が聞こえたような? ……まあ、幻覚見るくらいだし、幻聴が聞こえても不思議じゃないか。」

「セヒト…。今日は暇つぶしがくじでも置つて帰ろ」

「うふー! つ、待ちなきこよー! 聞こえたんでしょー。」

今度は、はつきりと聞こえた。

それもあるの気持ち悪い次元の裂け目から。

「なんですか? はつきから。あんまり騒がないでください。近所迷惑って近くには私とあなたしかいないじゃない! ?」

感です

「あ、すいません。気をつけます。…って何を言わせるのー? 近所迷惑って近くには私とあなたしかいないじゃない! ?」

「凄く元気ですね、この人。」

まあ、このままからかつて遊んでもおもしろいだけじゃ、話しが進まないから眞面目に聞いてあげますか。

「それで? あなたは僕に何のよつなんですか?」

「よ、ようやくまともな会話ができる」「3、2、1、終了?」…え?  
あつー待ちなさいー」

はつはつはー生まれつき筋肉の着き方がいいおかげで100mを10秒台で走れるこの僕に追いつけるはずが!「待てと言つたのが聞こえなかつたかしら?」

…追いつかれるビームか先回つたやつた!!

「さて、ようやく本題!」「そういえば今日、家庭科の授業でクッキー焼いたんですよ。食べます?」「ええ、いただくな

食べのかよーと、心の中でシッパリながら僕は全速力で家まで逃げた。

【20分後】

「ああ～疲れた。今日は最悪の日だったな～」

僕はベッドに寝転がりながら、ふと視線を壁にかかってるカレンダेに移す。

そこには今日の日付のところに血殺記念日と書いてあり、上から赤いペンで花の模様が描かれていた。

「はあ～。あの変な人さえいなければ、今頃あの世で精眠を貪つてただろうに」

「あら、それは悪い」としたわね

「お母さん！ストーカーが、ストーカーが来た！！」

「誰がストーカーよ！誰が！」

「じゃあ、住居不法侵入の不審者でいいよ

「……グスッ。もういや」

「ほら、泣かない泣かない。辛いことがあつたら、いつでも近所のおばさんに言いなさい

「そこは他人に押し付けるところじゃないでしょ！？」

「はい。まだクッキーあるから食べる？？」

そつ言つて、僕は力バンから1袋10個入りのクッキーの袋を20個とりだした。

「いつたい何枚焼いたのよ！？しかも、あきらかに前の文と繋がつてないじゃない！？」

「……クッキー……美味しくなかつた？…グスツ」

「え？あ、いや、美味しかつたわよ？…だから泣かないで」  
「本当……じゃあ、今日はもう夜遅いから、明日来て。クッキー焼いて待つてるから！」

「ええ、わかつたわ」

そつ言つと、変な女の不審者は次元の裂け目に入つていった。

ふつ、計画通り。

わて、もう寝ようかな。

「つて、騙されるか～～！？」

「グエ」

不審者さん上から降つてこないでください。



## 第2話　『女人+カオスフィールド』住居不法侵入の不審者（後書き）

ひとつと幻想入りさせるつもりが長引いてしまった。  
次こそは……

### 第3話『いざー幻想郷へ！呐喊しますー』（前書き）

主人公の名前を変更しました。

「迷惑をおかけして申し訳ありません。

### 第3話『こぞー幻想郷へ！呐喊しまー』

今、僕は住居不法侵入の不審者さんと向かいあつて話をしています。

「……えーと、色々あつて遅れてしまいましたが自己紹介をしたいと思します。

僕の名前は雷堂 幸稀。気軽に雷堂って呼んでください  
「や」普通苗字で呼ばれるー。・・・軽こつて言つてるけど、全然気軽  
じゃないわー。」

「趣味はギャンブル。特技は会社の株を買いくめて、実質的に乗つ  
取ることです」

「こきなり黒い部分をさらけ出さないでくれるー。・・・

「将来の夢は可愛いお嫁さんと普通に暮らすことです」

「嘘をつくんじゃないわよー。わつわつ、血殺しきりとしてたじやない  
ー。」

本当に元気ですね。」の不審者さんは。

「…とまあ、こんな感じで僕の自己紹介は終わりです。次はあなたの番ですよ

「……まあいいわ。私の名はハ雲 紫。スキマ妖怪よ

……今、なんと言った？

「そして、私があなたの前に現れた理由だけど、率直に言つと幻想郷にきて欲しいのよ」

おく。

これは面白そうな話だと僕の第七感が反応してくる。

「……その幻想郷といつのばどんなどこのなの？」

「簡単に言つと、人と妖怪が共存する世界ね」

よし行こう。今すぐ行こう。

「ちよつと待つて！3秒で仕度していくからー。」

【3・2秒後】

「「めん。遅くなつた」

「充分すぎるほど早いわよー。」

そうかな？

僕は〇・一九七秒くらい遅れたと思つたんだけだ。

「…それでは、こぞ！幻想郷へ…と、思つたんだけだ、どうせいつづいて行くの？」

「このスキマの中に入ればすぐに幻想郷に行けるわ」

そつと、八雲さんはあの気持ち悪い次元の裂け目みたいなのはスキマとついつい）を開いた。

……なるほど。

だから僕が飛び降りつけた時、空中にスキマを開いてたのか。

僕、飛び降りる

スキマに

幻想郷へ

「…しかし、何度もみても気持ち悪いね。それ

「気にしてるんだ。せっぱつ。」

……

「あれじゃあ、改めまして」

僕は叫ぶ

スキマに向かって

何の意味もなく

「雷堂 幸稀、呐喊しますー！」

第3話　『いざー幻想郷へ！呐喊します！』（後書き）

さて、この主人公を幻想郷のどこに送る？

#### 第4話 『森の中、少女と一緒に、マジック一冊』(前編)

改めて小説の難しさを感じた今日この頃。

## 第4話『森の中、少女と一緒に、マーラの一人』

やつてきました！幻想郷！

突然ですが、現在、僕は森の中で遭難しています。

もう既に、3時間は歩いていると思いますが、全く出れる気がしません。

「……もう、ダメ。限界」

いつまでもこんな森にいたくないけど、足が悲鳴をあげているので  
とりあえず休憩にします。

僕はそちら辺の倒れている木に座り、持ってきたリュックからお菓子を取り出した。

「うん……やっぱり、マーラの一人はリランの生み出した食の極みだね。好意に値するよ」

自分でも結構意味不明なことを言しながら、マーラのマーを食べ続ける。

すると、ビルからか可愛らしきリボンを付けた金髪の少女が現れま

した。

「ねえ、あなたは食べてもいい人間？」

「……」めん。こんな時、どうこいつ反応したらいいのか分からないんだ

「もうなのかー」

「もうなのだー」

「…………」

「…………」

……うん。

会話が続かない。  
どうじみつ。

と、思つてみると、田の前の少女のお腹から『ぐうーーー』  
音が聞こえた。

「……もしかして、お腹空いてるの?」

「…………うそ

僕はリュックの中から、もつひとつ ラーメンのマークを取り出すと少女に渡す。

「この中には美味しい食べ物が入ってるよ。食べてみて」

少女は箱を開け、袋から一つ摘むと食べた。

「……これ、凄く美味しい！」

「よかつた。まだまだあるから、たくさん食べていよいよ」

僕がそう言つと、少女は凄い勢いで食べ始めた。

「ちが少し引くぐらいで。

【20分後】

「あれ？ 寝ちゃったのか

僕がゆっくりお菓子を食べていると、お腹がいっぱいになつたからか、少女が寝ていた。

「仕方ない。この娘を放つておく訳にもいかないし、今日はここで

「寝るか

僕はリュックから寝袋を一つ取り出し、一つに少女をもう一つに僕が入る。

「おやすみなさい

そう言って、僕は寝た。

こうして、僕の幻想郷初日は平穏に終わったのだった。

## 第4話『森の中、少女と一緒に、ピアノの一人』(後書き)

これから展開を悩んでたり、遅くなってしまった。すみません。

ん。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0131o/>

---

東方幸運録

2010年10月12日06時39分発行